

1994. 12. 3



尼崎市立小園中学校 第2学年

社 会 科 通 信

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No. 8

食べてみよう 先祖の食べ物

江戸時代の農民が 毎日食べた 雑炊

江戸幕府は、慶安2(1649)年2月26日に、「諸国郷村江被仰出」という表題で記

録されている「触れ」を公布しました。

これが「慶安御触書」で、百姓(農民)の「心得」として、百姓の生活一般に関する規則を、江戸幕府がうち出したものでした。

ちなみに「触れ」は、元来、口頭で伝えられる命令でした。「触書」は、支配階級の武士などが「触れ」の内容を記録した「文書」のことです。

その中から、「百姓」の食べ物に関することだけを抜き出すと、以下のようなものです。

現代語ではないので、少し難しいかも知れませんが、当時の雰囲気をつかむために、わざと原文を(漢字は現代のものをしますが)紹介します。

「一 耕作に精を入、田畑之植様 同 拵 に念を入、草はへさる様に可 仕、草を能取、切々作之間江鋤入仕候得ハ、作も能出来、取実も多有之、付、田畑之堺ニ大豆小豆など植、少々たりとも可 仕 事、一 百姓ハ分別もなく末の考 もなきものニ候 故、秋ニ成候得ハ、米 雑穀をむさ さいしに くわ せ せ 候、いつも正月二月三月時分の心もち、食物を大切ニ可 仕 候ニ付、雑穀専一ニ候 間、麦粟稗菜大根、其外 何に而も雑穀を作り、米を多く喰ひつふし候ハぬ様に可 仕 候、飢饉之時を 存 出し候得ハ、大豆の葉あつきの葉さゝけの葉 いもの 落葉など、むさとすて 候 儀ハ、もつたいなき事に 候、」

どうです？ 読めましたか？ 君たちは、学校に通って8年目に入っています。その君たちですら、読めないでしょう。当時の農民(百姓)は、学校に通うことな

どできなかったのです。そうですね。当時の農民が、こんな難しいものを読めるはずがなかったのです。だからこそ、「触れ」¹⁾だったんでしょうね。

そうすれば、誰が幕府の命令(規則)を伝えたのでしょうか？ それを考えると、とても深い問題がでてきます。命令は正確に伝わったのか？ それとも変化したのか？ 謎はいくらでも出てきます。それを研究するのが歴史学の一面なのです。

さて、このように命令された百姓は、実際にはどのような食生活をしていたのでしょうか？ 次に、享保時代の吉宗に幕府の役人に抜擢された、田中丘隅の著した『民間省要』から、江戸近辺の百姓の食生活をみてみましょう。「田方に生きる百姓は、雑炊にしても米を喰ふ事あれども、山方・野方に生まれては正月三ケ日といへども、米を口に入る事なき所多し。粟・稗・麦など食に炊くとても、菜・蕪・干葉・芋の葉・豆ささげの葉、その外あらゆる草木の葉を糧として、穀物の色は見へぬばかりにして、而も朝夕飽く程の事なく、漸く日の中一度宛ならでは是を喰ふ事なく、餘は前に言ふ粥の類にて日を送る。

朝夕の膳などに坐ると言ふ事もなく、少し物をたべれば蟹の泡の如くなり、茶をいくらか汲み飲んで足れりとす。斯く恐ろしき物を食として、而も明七ツより起て骨を折り、夜九ツまで働きて縄をなひ、草鞋を造る。其辛苦常ならずば、一日も其内に住む者あらんや。都に育ちては今様の咄しに、一生耳に聞く事もなき人は誠とも思はじ。都人にかかる食物をあしらへば、鉄丸を食はすと言へ共、一口も喉には入らじ。」と、田中丘隅は報告しています。

農民は正月でも米を食べることはありませんでした。毎日、穀物の色のわからぬ程まで、あらゆる草木の葉を入れてたいた雑飯・粥などを食べ、お茶を飲んで腹をふくらませていたのです²⁾。

そして、そのような生活は、明治時代に入っても江戸時代と変わりませんでした³⁾。

さらに、第二次世界大戦後の昭和23年ごろまで、このような食生活は続きました。特に、戦争中は食料不足に悩んだため、カエルやイナゴまで食料として採取されていました⁴⁾。それが、わが国の庶民・百姓の食生活だったのです。



現代の黍(きび)栽培
兵庫県米上郡米上町で撮影 1994. 11. 27

¹⁾ たいていの場合、文書による規則は、「法度」になっていました。

²⁾ 渡辺 実『日本食生活史』吉川弘文館 1964. 4. 10 pp. 245-246

樋口 清之『新版 日本食物史 一食生活の歴史一』柴田書店 1987. 1. 5 pp. 226-227

³⁾ 前掲 渡辺 実『日本食生活史』p. 304

⁴⁾ 前掲 樋口 清之『新版 日本食物史 一食生活の歴史一』pp. 282-283